

(講習会に当り配布せるものなり、二高弓道部蔵)

無発の発即ち無発先中と言ふことが射を学ぶ上に尤も大切なことである又修養を要することである。引絞つて満を持し逍遙不迫無限に通貫一枚の働き其の異常なる緊張をもつて漲つて居る。此の無発絶対の境地は禅家の(無)も此の意味に外ならないので射中には人間と弓との此の三休一枚の合致態まで融合一致したまゝの靈界の発現の内射を行はんとする心も射にある心も結果を希ふ心も発せんとする心も弓の収縮圧迫により「\*鉛筆で「より」を「よる」に訂正/桜井によるもの?」苦痛も重荷を下ろさんとする心も一切脱離して無限の世界に合致せんとする姿が即ち自己本来の面目であつて、此の不退転の絶対境は眞の自己の實在と自己の現在を表現してゐるものである。

此の人間の所有する最大の生命力の発現せらるゝ絶対の創造は修養道として尤も崇高なる人間最高の大美であつて、総ての宗教を超越したる射教なのである。人間には靈と肉との二つあるが故に靈肉二つの鍊磨も必要であるが此の境地に至りて靈肉正しき試練によつて肉其のものゝ最大限の力を超越して肉其のものゝ存在を認めない、即ち粉骨碎身の境が到来する。然しそれは人間以上に超越した時であつて限度の力までゝは不安と肉の存在を認めて無限の●欲を発せしめることは不可能である。故に射中には結果・性欲・名望・不安・闘争・競争等は最も品性を逆転するものであるから、総てを離脱せしめられて始め

て眞の自己本然の射を見ることがの出来得るが故に、不識の間に修養を積み一切の迷見を離脱して善化して行きつゝ永遠の生を得るに依つて人間救済の大教ならずして何んぞである。

人間は修養を要することは勿論なるも、修養とはそんなに六ヶ敷いものとはばかり思つてはならぬ。つまり修養とは第二の天性であつて、宏大なる発展的創造的理想に向つての習慣づけて行くことは尤も大切なことで、つまり弓を引絞りつゝ無限に延長と左右に開かんとする力と天地即ち上下に貫かんとする自己全体の力、此の思想的精神は人間発展的想像力の進展を来す所以なのであつて、弓を射れば心気さわやかに明るさを増すことになると云ふことは当然なのである。少々な病氣は弓を射れば全治することは当然過る位当然なのである。

一寸脱線したやうだが此の稿は私の心の走るまゝなれば修正を加へないで其のまゝに進めたいと思つてゐるからお赦しを願ひたい。

私は射人に要求することは、射は須らく自然であつて人生も大自然の働と合致した自己無限の働でなければならぬと思ふ。射と自己とは一枚の偽りなく、着実に其の展開は偽りなき姿の矢でなければならぬ。人間は総て欲の悪魔はいつも付纏ふもので、自己の不注意に乗じ巧に自己心を籠絡して杭陥に落入ることが麻酔「\*?」して居ることに気がつかねばならぬ。元の明智に出でやうと苦闘を続けつゝある人は余程の修養的人物であるのである。それで人間には理論的人物と實際的人物とあつて、どうしても實際を得た實際人生でなければ眞の人生を味ふことが不可能である。故に独裁して自惚れたる者即ち辛い辛いと射生の境を履違ひて独尊を極めこむ者は、自己を無上郷として

満足して喜び居る者は直ちに退転して品性も向上せぬ者である。

夫れで弓は的中病者のする弓技であつたなら、真の射の立合はそんな浅薄なものではない。一射毎に自己を洗練しつゝ射三昧に馳駆する名ある射人はそんな生ぬるい安価なものではない。一箭に全生命を打込んでかゝる大覚悟は何んと莊重嚴肅なもので、真の大和魂の持ち主たる射の雄であるのである。

射は人を造るためのものであると云ふ根本義をもつて第一義とし、的中は第二義としての中一切を破壊して根本的に是正しなければならぬといふが、併し夫れは非常に困難な事業であると同時に尤も緊急な問題なのである。畢竟指導者と射人の心懸け一つにある。